義太夫

義太夫協会々報
第8号
昭和51年1月24日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6－18－2
新橋演舞場別館 TEL(541)5471

拍手

会長　吉川英史

元日の初詣に打つ「かしわで」の音のすがすがしさは、格別であります。その「かしわで」は、打ち方が遅く、数も少ないのですが演奏や演説に対する拍手の方は、「万雷の拍手」などという言葉があるように、物凄いこともあります。外見は同じでも精神がまったく違うのです。「かしわで」には厳粛さがあり、敬虔な心があるのに対し、普通の「拍手」の方には、「ほめてやる」「ご苦労さま」「しっかりやれ」といった人間臭さや自己満足があるようです。

十五、六年前のこと、NHKの邦楽育成会では、邦楽の模範演奏を拝聴する時間がありました。宮城道雄・宮崎春昇・常磐津文字兵衛（後名文字翁）その他、義太夫節は竹本土佐広・豊沢猿幸（公）のご両人で、演奏に立合っていた私は受講生に、あらかじめ次のように言っておきました。―「模範演奏に対しては、頭を下げて敬意を表すべきであってやたらに拍手をするのは軽卒です。」私は壇を降りて、受講者一同とお辞儀をすることにしていました。

大体、昔の日本では、音楽や芝居などで、今のような拍手はなかったようです。八十八才の老母に、次のような質問をしました。―「文楽の口上で、『相勤めまする太夫、竹本何太夫』という声が終らぬうちに、お客は拍手をするので、つづいて紹介する三味線弾きの名前は、拍手に消されて聞きとれませんが、昔はどんな風でしたか?」

大阪生まれの母は、意外にも、「昔は、拍手なんかせんかった。静かにせんと、隣近所のお客から叱られるさかい…」

だから、口上は中途で休まず続ける習慣が今も続いているのでしょう。

だが、これでよいのでしょうか。民主主義の現代、太夫だけが拍手を送られるような形になっていてよいものでしょうか。もし、解決するとすれば、次の三つの中の一つだと思います。

①昔のように、拍手はしない。（現在は無理でしょう。演奏家も拍手を期待する時勢）

②太夫に対する拍手がおさまるのを待って三味線弾きを紹介する。（現実的な解決法）

③太夫の名前のあとでは拍手せず、三味線弾きの名前のあとで、纏めて拍手。

最後の案③が最善と思いますが、多数の客の理解を得ることは困難ですから、現在としては、口上の唱え方を改めることが、一番やさしい解決法でありましょう。

年頭によせて

副会長　豊沢仙広

明けましておめでとうございます。

夢が浮世か、浮世が夢かと、楽しんでいる間に、何時の間にか喜寿を迎えてしまいましたが、相変らず年を忘れて元気いっぱい、忠と孝、義理と人情を巧みに表現した近松文学の古典芸術を少しでも現在の世の中の為に広めたいと、老の身に真心をこめて人間造りを楽しんでおります。

我が趣味の芸術に明け暮れなさる皆様は、不景気なんか美声で吹き飛ばし、元気よく五十一年をお迎え遊ばされし事と哀心よりお慶び申し上げます。

昨年はとりわけお世話をおかけしましたが三越公演も盛大に、又、NHK心身障害児のための慈善公演も大入りで、赤字も出さず十二分に「寄附」の出来ました事は、ひとえに義太夫協会御支援の賜と正会員一同感謝、感激いたしております。代表にて、この紙面を借り、厚く厚く御礼申し上げます。

文化庁にも義太夫協会の真面目な事業ぶりを認めて頂きました故、今年はきっと助成金を増やしてもらえる事と信じております。

役員の皆様に切符の押し売りなどせずとも良き事業が出来ます様にと、一同一生懸命に努力いたしております。一日も早く会員の皆様に喜んで頂ける報告の出来る日を楽しみに五十一年を最良の年にしたいと、新入生に力を入れて、共々に勉強にはげんでおります。全員美声で、いづれが勝り劣りの見分けはつきませんが、この若き新入生から、やがては「どんな名人が生まれるやら……昇菊、昇之助時代の様な女義華やかなりし頃の再来を見たり聞いたりして、ゆっくり天国へ旅立ちたいなどと、一人で楽しんだり笑ったりしております。御勇気の皆様におすがりしたり甘えたりして勉強にいそしみ、生き甲斐を感じて、芸術が伸びて行き、義太夫節発展と共に、協会も成長して皆様の協会としてはずかしくない又となき社団法人義太夫協会が出来上ると存じております。

賛助会員、特別会員、準賛助会員の皆様、義太夫協会をどうぞ可愛がって、末長く御支援、御協力下さいますよう、代してお願い申し上げる次第でございます。

先づは、年頭の御挨拶まで

昭和五十一年一月吉日

義太夫東海道綴

内野三憩

表題は昭和五〇年度文化庁芸術祭参加、十一月二十九日三越劇場、「義太夫名曲でつづる東海道」の印象をかくための粗略である。

番組用紙が豪華で、表に床本を薄摺りにしたのも趣きがある。番組の運びが江戸日本橋をでて、1.鈴ケ森、宿駅からは二番の品川に因む鈴ケ森の刑場「恋娘昔八丈」の哀話から出発。ここは伴随院長兵衛と白井権八の出逢も思いだす。2.箱根「雪仇討」滝の段は、雪勝五郎の妻初花は貞女烈婦の鏡。3.沼津は、日本三大仇討の一つ。鍵屋の辻も念願成就の道中裏の悲劇。4.島田の宿屋、5.大井川は「朝顔話」、私は駒沢次郎左衛門のモデルという熊沢蕃山を学べば学ぶほど戯曲の立派さを思う。6.「道中双六」は、岡崎へという訳。7.五十三次あがりの京へ悲しい「旅路の嫁入」力彌の妻としたく母戸無瀬が娘小浪を連れての道行、偶然今年の一月号『演劇界』の表紙が歌右衛門の戸無瀬だった。古い道中案内書横とじ小本をみると今がいやになる。広重の

五十三次は宝。戯曲作者の功も大。この古典を伝承する芸能人も尚い。今回の演技者二十名余、企画から公演と影の功労者も数多い。番組も卓抜で、東海道がすんだら他の街道筋もたくさんある。歴史を戯曲的に蘇らすのは今からびかけた現今に必須だ。

三越劇場は古くなり売場ほど絢爛とせぬが親しみ易い。広重ばりの富士山の緞帳が東海道を義太夫で綴るにぴったりだ。舞台背景に金泥六曲屏風三組を並べ、太夫・伴奏八人がゆうに座す赤地の高座、紫の大形座布団、上手下手のいぶし銀めく大道具、下手にはくろみすが描かれている。この舞台構成は、マイクの音響効果と演劇的雰囲気をかもす。上手すみっこに外題のめくりビラを立て、その下に沈めた恰好の花束籠は寄席風の逆戻りだ。プログラムは全客が持っている。ビラに替えて、いい声と上手な口上を聞きたい。口上は相撲の呼出しと同じく義太夫伝統の美である。三越は素語りをきくのに、三味線が本牧亭より太夫の声をつぶさず、しっくり伴奏の重要さをも味える。国立小劇場では音響装置の行過から太夫の声、三味線とも金属音が混って微妙なところが全くきけぬ。人形をみるより仕方ない。

演技者のお顔、髪のみだしなみも、本牧亭より念入りとお見受けし、客として好感がもて、高座姿勢お作法も揃って立派だった。近頃本牧亭でも掛合がふえたが、此処では昨年に比べ、相互の間や気合が際立って良かった。大演奏会では、個人技は無論のこと、掛合は華やかさに於て見せ場である。時流にこびる訳でないが、徒に頑固に周辺をみないのは愚しい。高座衣装もこの度、外題や演者の年齢がよく配慮されていた。床着黒一色は、既に無地色物がでているので、色物や黒にしても袖下部に色変り、袖模様がちらとあったら何んなに映るか。柄物床着は、肩衣袴が漸くやや派手になってきたので、調和がとれぬとまずかろう。洋髪まがいの方が多いので、髪飾の利用がうまく行かないので工夫を望む。決しておしゃれを奨励しているのでなく、女流素語をも総合芸術として発展を期待する考から、一切を演出とみるからである。三越劇場の照明はよい。座席も椅子がよい。義太夫は背中をまるめ、小さい座布団に胡座をかいたり、横尻をして聴く時代は疾にすぎている。伴奏楽器に今年も琴・胡弓の恩恵に浴したが実はもっとふやすと良いと思う。数ケ月前、歌舞伎テレビ放送の歌右衛門の阿古屋をみたあと、丈の談話をきいた。「琴・三味線・胡弓の実演を後輩に伝えたく思うが、熱心にやろうという人がなくて困ります」と語った。芸界で身を立てる俳優が、何たる事と腹が立った。女流は齢がくれば一方には主婦である。それでも現に協会員は、みな現役の限り、凡ゆる困難にうち勝って努力している。

即ち今年の芸術祭参加は、若い方は若いなりに、大先輩（二名ほどの病欠は惜む）は堂々と力演し、整然と立派な芸能を披露した。私が切符をやった人が、新内から義太夫党に転向すると言った。何うして？　義太夫の具象性といったものに打たれました、と答えた。この勢で、若い方々は早く上達し、大先輩は健康に十分注意して、更に高座をながく勤め現在の老若間の技量落差の溝をうめ、優秀な現役実人員を増して欲しい。

芸能の成立、この際狭義に言って義太夫の演技と鑑賞の真の芸能の成立は、演技・鑑賞の両者の共感融合によると信じる。鑑賞者は大部分謹聴している。中にこれを邪魔する無作法な人がいた。膝を叩き、手拍手をとり、演技者について鼻唄のように語っていた。こうした客はローレベルの陶酔者にすぎまい。客の向上について、対策を考えてみたが、酒に酔ったと同じで仕方がない。出物頻りと替える。

演技者に、この安易な不作法の余裕を与えぬほど力演して貰うのも一案であるが、種々の条件下、力演ばりかも続かぬ。

〃太棹雑感〃

竹本彌乃太夫

義太夫教室が再興し、語りに加えて新しく太棹三味線の実習を行ってから早や四年、その間多くの若い人達が、太棹という楽器に触れた。元来、三味線はプロ以外には教えないというのが、義太夫界のしきたりであったが、古典芸能が見直されて来た折柄、思い切って今までの慣習を破った。幸い若い人の入門希望者も多く、教室花盛りの感があった。それともう一つ、義太夫の朱（三味線譜）も同時に公開し教えた。それには教則本ともいえるテキストを作成しなければ意味がないので、主として曲節本位の小曲を蒐め、第一集から第四集までを、更に、義太夫本来の語り物の中から、特に道行景事物を中心としたテキストを現在まで十四冊を刊行した。当然テキストには朱を書込んであり、語りにも使える様に、その共有性を考えて作ったつもりである。これまで、よく生徒に、『語りを習っても、どうして義太夫には符がかいてないのか』とか、『義太夫の符本は売っていないのか』と、質問されることがある。三味線といわず語りでも、これからは教える先生の三味線符を、テキストに書込むべきだと私は考える。異論はあると思う。今までの常識外のことをすると、兎角、文句ヲつけたり、陰口を叩かれるのは、何も義太夫界ばかりではなさそうだが、特に此の社会は、徒弟的な制度の因襲が根強く残っている。芸事を修業するには、時には現代と雖も、きちっとした礼儀作法や、芸の厳しさを身につける為の人間的修練ともいえる数々の掟のようなものを体験し、体ごとぶつかって、肌で覚えて行く方法があっても当然かとも思えるのだが、矢張り、此れからの時代に処して行く人達は、昔と違って高度な教育も受け、又文化も進んでいる現代に、新しい感覚で、それなりの改善開拓すべき道があると思う。たゞ私は、常に、現代的風潮として、全て人間的モラルに欠けている人が多いということを言う。私などは、戦中派だが、非常識と考えることが、現代では常識なのだというようなことが、大学へ行っている息子や娘と話をしていて、時折驚かされる。私より遙か先輩達も、嘗ては同じような事を考えていたかも知れない、これが時代相というものなのだろうか。

話が横道へそれたが、ともかく若い人達に接する為には、その人達の意見をきゝ、そして理解してやりたい。協会は義太夫教室を開講し、語りとともに三味線コースも順当に、四十七年の廿四期以来、毎年十数人づつの希望者を出して来たが、一人減り、二人減りして、各期とも脱落者が増えて、数人づつになった。さすが花のニツバチの二十八期生は、昨年始めた一番新しい所為もあって、十四人が頑張っている。脱落組の中には、とてもつゞいて行かれない、とコンプレックスを感じた人と対照に、朱はどうにか読めるようになった、もう譜本さえあれば独習が出来る、集団じや、何時までたっても上手になれない、等現代ツ子むき出しの割切り型が多い。男女別では女性が圧倒的に多いのも、女性上位の昨近の様相、ギター等の経験はあっても、三味線は初めて、という人達ばかりだから、糸道がつく迄は大変である。骨格がどうかしているのじやないか、と思われる人もいて、手ほどきの難行も随分と味わった。それでも一様に、音感だけは秀れていることは幸いで、朱の習得も早い。所謂、ペーパーテストはOKという人が殆んどである。車だって、実地が必要と同じく、数多く実地の舞台へ出られる機会は作ってやりたいと思っている。前述のように、テキストを使い、朱を覚えさせることに異論があっても、その効用大いにありと自負している。例えば集団合奏で、何んとか全員が一ツの曲に溶け込むことの出来るのも、楽譜のおかげである。義太夫の三味線を弾くというよりは、太棹という楽器を使って一つの曲を演奏するという形が、現在私のとっている集団の教習のあり方である。段物等で語りに附随した義太夫本来の曲は、それこそ難しい。併しそれらも、意外性を持って、容易にこなすことが出来るように変って来るであろう。たゞ一番問題なのは太棹三味線が皆無なことだ。楽器の供給がないと、今年あたりは三味線教習を中止せざるを得なくなる。習えば自分の楽器として欲しくなるのは当り前、現在まで何十挺もの三味線を調達出来得たが、もう限界に達した。若い人達が太棹に魅せられ、やりたくてもやれないようだと、日本文化の挫折が、こんな片隅から起りかねない。四年間太棹の集団演奏の指導に取組んでは来たが、他の芸能の三味線を凌駕する太棹の音色の活かし方、その行方こそ、今後の課題であろう。

歌舞伎の義太夫＝竹本連中の
後継者養成事業

竹本講習始まる(二)

前号にて御紹介致しました通り、只今竹本養成事業が、国立劇場・伝統歌舞伎保存会・松竹株式会社・義太夫協会の四者共催で行われている。講習生は小林将人（竹本清太夫）・鍬田実（竹本立太夫）・林　明（竹本国太夫）の三人で、いずれも太夫志望者である。

去年九月十日より実施され、竹本実習が三分の二、義太夫基本が三分の一位の割合で進められ、竹本扇太夫・竹本雛太夫・豊竹寿太夫・竹本米太夫・鶴沢扇糸・鶴沢紘二郎・豊沢猿若・豊沢螢緑・野沢吉平・竹本重之助・鶴沢三生・竹本越道の各氏が教師として力を尽くされた。

運営に当る国立劇場養成課の方々の大変なお力で順調に進行したが、特筆すべきは、十二月の興行に舞台実習を兼ね各座に出演したことであろう。竹本清太夫・竹本立太夫の両君は京都南座顔見世興行の「曽根崎心中道行」と「吉田屋」に、また竹本国太夫君は国立劇場の「忠臣蔵」通しのうち進物の場に出演した。それぞれ初出演のこととて、指導する人・される人、懸命の努力の甲斐あって、先ずは及第点を得たことは誠に喜ばしいことであった。それに続いて、国立劇場新春歌舞伎公演の「蘭平物狂」のツレに、三人が交替出演をしている。（28日まで）

本年に入っての講習は、早くも正月五日より行われているが、こゝでもう一つの大特筆を挙げると、今月二十二日に「歌舞伎第三期研修生試演会」が国立小劇場で行われるが、その中の歌舞伎実技「帯屋」の義太夫を竹本講習生が担当することになったのである。今迄歌舞伎研修生の試演会や卒業公演における義太夫狂言は、竹本連中のベテランが助演したものだが、太夫だけとはいえ、竹本講習生が参加するなどとは、つい半年前には考えられなかったことである。「帯屋」は、うまく三つに分けて、前を立太夫・中を清太夫・後を国太夫の三人が分担して語る。尚三味線は鶴沢紘二郎氏が指導出演をする。（歌舞伎指導中村松若氏・竹本指導竹本雛太夫氏）。三月中旬には、歌舞伎研修生卒業公演があり、実技として「引窓」が出るが、試演会の成果によっては、竹本講習生の参加出演もあり得ると聴く。三人の大いなる健闘を祈る次第である。

右の如く、有望な講習生を得て着々と行われているが、今年の課題は、三味線の講習生を一・二名つくることであろう。

協会会員・義太夫教室ＯＢ諸氏の中で、竹本の三味線を志してみたい人、またはお知合いで適当な人が居られたら、協会まで御連絡下さい。

（以下次号）

高山樗牛の近松論

内野三憙

二　近松戯曲の女性

巣林子の女性と題して、樗牛が明治廿八年四月『帝国文学』に載せたものである。

総論的に、㈠巣林子が戯曲に於ける人、㈡女子とは如何なるものぞ、㈢愛と名誉、㈣嫉妬は愛の反面、なる項目により論述し、各論の意に「天の網島」のおさん、「出世滝徳」の吾妻、「槍の権三重帷子」のおさゐ、「宵庚申」のお千代を引例して、構文上㈠から㈣と続けてある。全文を通読すると、総論或は序論とする㈣までに非常に力をいれ、屢々西欧戯曲家の言を引いて、巣林子即ち近松の大近松たる所以を説く大文章をなしている。天才樗牛が、近松の時代物から世話物に転じた円熟期以後の名作の深奥を、こうもふかく理解し啓蒙的なまでの筆勢で章を進めた才学に老い来った私は圧倒される。

樗牛の文章は、噛んで含めるように詳細を極め、美辞麗句難字の連続なので、その摘要抄録では彼の真意も文趣も伝えかねるので、初め予定した㈠から㈣までを、㈠から㈣即ち総論に止め、㈣から㈣の各論をさらに一回追加したい。その故は第一に近松の世話物の典型が、明治以後に至るまで範として後世作家に尾を曳くこと、第二は人の生涯に起る世事百般の吉凶一切の実相を、克明に戯曲のうちに展開し、是に伴う諸多の感情・道義と理知分別を知る手引となり、又人間と世間を考える問題提起でもあると信ずるからである。

文化人が人なるものを考え知る道は幾筋もある。考え学んで、人はやがて階層や立場なりの自己を発見する。そして家庭人・社会人として世に処する点は、近松の時代と現代と人の心理世界に変りはない。依って形に於て古典とする近松世話物に登場する凡ての人物は、その心理の根底にあって現代に流れ続く。故に古典が理解され共感をよび、感動を誘うのであり、考えさせられもするのだ。そこで私は、先覚であり青年学者であり情熱の人であり、然も現代忘れさられた感のある樗牛の近松論の蒸返しをしようとするのである。

右の㈠から㈣までに従いて、所論の骨子を探ると、㈠巣林子が戯曲に於ける人の『人』は、「戯曲の目的とする所は……一般人間の本性真相を顕はすにあり。」と論断し、世話物の必要性について、一般人間の希望と人情の真相を表現するのに、時代物より世話物が優ることを解説する。さらに近松が遊里教坊に多く材料を求めた理由として、「二本指すを侍、一本指せば町人と計り思ふか、大小は此の胸にある」（生玉心中中巻五兵衛の言）をひいて戯曲的人物の真相を言い尽したものとする。近松が一般に卑賤なものとされる芸娼妓に徳義を発見し、その薄命悲哀に痛切な同情をよせた点を、近松の心の博大なこと、彼の眼には長袖、甲冑の外装に用はなく、天真の心性あるのみ、とする近松に樗牛は傾倒する。エヌスの神像が名妓フリネーをモデルにした例をとって、近松が女性を遊女に求め、「彼は遊女の中に人間を見たればなり。」と書く。吾々は「女郎に誠なし」ま反対な近松の遊女を余りに多く見、それを改めて納得する。

㈡女子は如何なるものぞ　では、「偏へに感情的なる、一たび情機の動く所、強ひて虚静を装ふ能はず、天真爛漫として蘊蓄する処少し。彼はなべて感情の鏡なり、社会の生ける戯曲なり、一般人生の悲哀と希望とは明晰に忠実に彼により発揮せらるゝなり。女子なかりせば此世いかに寂しかりなん。」（省略、現代活字に改む以下同）不思議なものは、スフインクスと女心である。女は果して柔順か、いかにも僻む、怨も執念ぶかく、復讐せずにはやまぬ！　これが樗牛の近松戯曲への理解であるが、近松は是を止むに止まれぬ女心とその結果生ずる女の浅はかな発作的行動だと同情することを忘れないと近松を観る。

㈢愛と名誉　即ち近松戯曲のピーク、女性の愛情と名誉に及ぶ。樗牛の名誉の語は、今日いう自尊心・自負心・自我・自信などのニユウアンスを持つ。「愛の詩人なる近松は亦女性の詩人なり。愛情は女性によりて最も多

く発揮せらるゝものなればなり。彼は愛を以て本性となし、配するに名誉心を以てせり。」と言い、女性の名誉心は積極的願望ではなく消極的意思だとゝ、近松は愛と名誉心を女子の二大特性とし、この観点に立って戯曲を書いたとする。

近松がいかに此の二大特性を戯曲に活動させたかの論を要約すると、女性の欲望は概ね保守的・受動的だが、一旦満たされた幸福感は、全幅の精神を傾けて此を醇化し美化し楽園とする。運命の前には従順な奴隷だが、愛情の自由独立には専横な君主である。女性は満足感を広さより深さにおく。ために一朝この満足感を損けたり失ったりした際の、悲哀は深刻で、往々思慮考察を欠く。女心の一徹で恩返しのない弱点である。理性も亦常に女らしさを失わず、その関する事柄も、わが身わが男、わが家族である。窮極女性万端の行為的機序は、愛情に帰着する。また近松は、ある環境の中の女性の愛情のアンバランスから、不慮不注意から、理性を失う結果となるとする。女性らしからぬ犯罪は、愛の眩惑に因ると近松は同情する。

㈣嫉妬は愛の反面　について「巣林子は嫉妬は愛の反面なるを最も明断に表現せり。蓋し財を欲せざる者は他の富を羨まず。他を愛せざるもの、もしくは他を愛せんとの情無きものは、他を嫉妬するの謂はれ無ければなり。」と。蓋し以下樗牛の所論は数学のように明解である。

樗牛は近松戯曲の嫉妬に、積極的消極的の別を立て、前者を二女子が一男を争うを指し後者は一女が愛情の対象をもたぬ際、他の男女の情交を羨望する所謂法界悋気だとする。即ち俗にいう傍焼・岡焼を指す。近松は愛は女性の本性とするゆえ嫉妬も亦女子の本性とした。

そこで愛と嫉妬の葛藤も亦人間社会の自然現象として、当然近松戯曲の素材をなす。というより寧ろ近松世話物の重要素材で、時代的に、その場として遊里、人として遊女が主役となってくる。配するに可憐でうぶな町家や農家の娘や妻女が登場する。愛情の争は畢竟利己排他の実践から悲劇をうむ。即ち「まゝならぬ」とは愛が名誉心の束縛を脱れようとする歎声、「浮世の義理」とは、名誉心が愛を抑制す羈絆に他ならぬ。換言すれば恋愛至上である。

樗牛はこうした理解のうえに、近松の深大さに傾倒したのであった。　（以下次号）

―お詫び―

本誌第七号第二頁上段七行目に、（品川）とありますが、私の原稿には無かったのです。何うしたことか入ったのです。龍華寺が有名な寺なので、その所在地を東海と略記したのが、禍の原因でした。私の責任です。

内野

―・―・―

編集部の手違いにより、大変御迷惑をおかけして申し訳ございません。改めて、お詫び申し上げます。

編集部

国語・音楽の学習に資する
文化庁助成
"義太夫"学校巡演のおすすめ

義太夫は日本音楽の中でも特殊な地位を占めていますが、滅多に聴くことが出来ません。迫力あるナマの演奏を解説入りでお届け致します。

記

一、学校巡演の範囲　都内及び近県

二、プログラム　演目・演奏時間等は御相談に応じます。

（プログラムの一例）

イ、日本音楽と義太夫についての話
（講師一人）10分位

ロ、三味線音楽についての話
（講師二人）20分位
（楽器の解説・実演と質疑応答）

ハ、演奏

1. 近松門左衛門作
「冥途の飛脚・新口村の段」
（太夫・三味線各一人）20分

2. 中学校音楽科鑑賞共通教材曲
「卅三間堂木遣音頭の段」
（太夫・三味線各一人）15分

只今、協会ではこのような事業を行っております。お知合の方におすすめ頂ければ幸いです。詳細は協会事務所までお問合せ下さい。

大序を顧みて

若手一同

昨年末、「大序」の連中が集まり、反省会兼忘年会を開きました。今迄ごく表面的なつき合いだった私達が、この様に親しくなったのもこの「大序」のお陰と言えます。

話題としては、誰のどこが悪かったとか、良かったということから、何を稽古してみたいとか、女義公演の将来、特に若手が中心となる会の希望などに発展して行きました。

感想としては第一に、猿三郎師匠が進んで稽古をして下さった事で、これには全員が心から感謝しております。私達はとにかく一生懸命で、余裕がなく、それぞれの役をつかみきれなかったということに尽きます。が、「大序」を出したのは確かに意義が有ったと思います。又、いくつかの点についてお客様方がどう受止められたか御意見を伺いたいのですが、当日配った刷り物の反響とか、肩衣の件（役に応じた肩衣を調達したのですが、視覚的にどうだったか）揃えた方が良いとか無い方が良いとか。勿論、語りについては一番気になりますけれど……。私達としては堂々とキンキラの肩衣をつけて出ることのおこがましさや、人数が多いので肩がぶつかったり、語ること以外に気を使ってしまうのでいっそのこと「大序」だけはみす内として開演時間以前に終る様にしたら良いという意見も出ました。

前にも述べた様に今回は稽古回数が他の掛合い物と比べると異例と思われる位多かった訳ですが、私達の都合で全員が揃えない時もあり申し訳なく思っております。これは以後の事もあるし、又、持ち役以外の稽古もしたかったという皆の希望もあるので、例えば、稽古日であって都合の良い日に三人位ずつ集まり、一人だけで一段通して稽古していただき、ある程度出来たら掛合の稽古をする様にしていただきたいなどの意見が出ました。

これから先の掛合の希望としては、誰もが習っていないもの、あまり本牧亭に出されないものなどの条件で、無い知恵を絞り、本を見て、あれやこれや出してみました。

又、忠臣蔵の他の月にも通しものを出して欲しいこと。特集ものとか、せめて若手の会には何か企画を組んでみたいなど話題は尽きませんでした。

最後に、十二月毎に何年「大序」が出ることでしょうか。多分十年位は私達が勤めることでしょう。その節は今回同様、いいえ、今回以上に一生懸命に相勤めますれば、どなた様にも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

―東　西―

実感的義太夫論（投稿）

桑原須賀夫

「教室」の御陰で稽古を始めてもう二年以上になる。素人でも二、三十年のヴェテランが少しも珍しくない世界であるから、まだほんの駈けだしにすぎないが、生来飽きっぽい質で、何事も余り長続きのしない私としては上出来の方である。これも偏に義太夫の魅力の然らしむる所と言うほかない。二、三年の駈けだしが口はばったいことを言うようだが私は義太夫の魅力を二つの点から考えてみたいと思う。一つはその悲劇性である。周知のように、ギリシャ悲劇では主人公の死に依って幕を閉じるのを原則とするが、吾が義太夫に於ても、「死」が一段のクライマックスとして極めて重要な意味を持つことは今更言うまでもない。前者は西洋の古典劇、後者は日本の語り物という違いはあるにしても、全体に「死」の影を濃厚に漂わせている点では共通であろう。義太夫や歌舞伎の先行芸術たる能に就いてもほぼ同様のことが言えるのだが、特に義太夫には非常に強烈な「死」のイメージがみられ、主人公たちの一見理不尽で愚かな行為も、「死」によってのみ意味づけられ

浄化されるのである。彼らは又、自己の宿命に知悉して居り、その行動は冷静でありながらパセテイツク、最後に及んでは、まことにあっぱれな態様を見せるのである。私は「平家物語」の知盛入水の件、『既に見るべきものは見つ。今は自害せむ』の一文を想起せずにはいられない。「九段目」の本蔵も、いがみの権太も、玉手御前も、みなそのように死んでゆくのである。正に、義太夫は「死」のドラマであり、「死」を通じてのみ「生」はその全き表現が可能になるという逆説を、これ程美事に作品化した例を私はほかに知らない。「生」の異常燃焼が「死」に直結するという事実はそれ自体少しも奇異な事ではなく又、主人公たちの暗い、狂的とも見える情念も、われわれにとって必ずしも無縁のものとばかりは言えない。

さて、義太夫の持つもう一つの魅力は言葉に対する鋭敏な感覚である。この事は稽古を通じて痛切に感ずる事であるが、あの一見豪放磊落な語り口の背後に、如何に繊細な言語感覚が働いているか。片言隻語をも疎にはしない真摯な姿勢が、義太夫という類稀な言語芸術を生み出したことはまづ間違いのないことと思われるのである。

＊　＊　＊

皆様の御投稿を歓迎いたします。

76都民芸術フェスティバル

第六回邦楽演奏会

＊昭和五十一年二月八日（日）

＊於第一生命ホール

＊東京都助成による特別料金　七〇〇円

主催　邦楽連合会（義太夫協会・清元協会・古典会・常磐津協会・長唄協会・日本三曲協会）

後援　東京都

第一部（十二時半開演）

一、三曲　光崎検校作曲　桜川

二、宮薗　桂川恋の柵

三、義太夫　仮名手本忠臣蔵
　祇園一力茶屋の段（七段目）
　由良之助　竹本重之助
　お軽　竹本駒之助
　平右衛門　竹本駒龍
　三味線　鶴沢三生

四、清元　吉野山道行

五、常磐津　お俊伝兵衛　堀川の段

六、三曲　中能島松声作曲
　雨夜の月

七、長唄　勧進帳
　（終演予定四時）

お問合わせ　お申込みは
事務局まで　ー

第二部（四時半開演）

一、河東　助六由縁江戸桜
　静　竹本春華
　忠信　竹本素八
　ッ　竹本綾一
　ッ　竹本素之助
　レ　竹本越若
　三味線　豊沢仙広
　同　鶴沢津賀昇
　ッ　豊沢公治
　レ　豊沢公純
　弾　野沢松江

二、義太夫　義経千本桜
　道行初音の旅（吉野山）

三、三曲　光崎検校作曲　五段砧

四、清元　道行故郷の春雨

五、常磐津　薪荷雪間の市川

六、長唄　二人椀久

七、三曲　岡康小三郎原作　岡康砧
　（終演予定八時頃）

会員の手紙

小生は、十二月二十日の慈善公演にて、初めて女流義太夫をききましたが、師匠連・若手とも気迫のこもった熱演で大いに感心させられました。それにしても義太夫というのは大変な芸で、お師匠さん方のあの域に達するまでには、随分とつらく長い修練を積まれたことと想像しました。「大序」の若手は、上手下手は別として、皆、張り切って一生懸命やっており、とても好感がもてました。ただハネてから出口に並んだお嬢さん方は、何れも舞台で見るより数段きれいで、思わずどうしてだろうと不思議な気がしました。しかしテレビ女優も、実物はずっときれいだという話をききますので、それと同じことかもしれません。

印象に残ったのは「平右衛門」を演ずる朝重さんで、やや斜めから見たときの、その容姿のよさは魅力的で、あとまで絵のように残りました。でも、いくら平右衛門とはいえ、あの男っぽい声はどうだろう、普段の声をききたいもんです。

糸三さんはさすがに大御所らしい貫録、いちいちつばをつけてはメクリながらの語りが少しもわざとらしくなく堂々たるもの、光末さんの「師直」私はものすごくうまいと思いました。これはもう一度ききたい、まわりでも「うまい」とささやく声がきかれました。また「お軽」の綾之助さんが可愛らしいかんざしをさしての熱演は、その人柄がよくつたわるし、一方「六段目」の「郷右衛門」の越道師匠が、口を八の字にしてふんばり、間の遅いお隣りさんに注意するなど気性の烈しさまるだしにしてよく、この人に師事すれば上達うたがいなしの感をふかくしました。素人目ですから、とんだおかど違いかと存じますが、感じたままを書きました。半年後の若手を楽しみにしています。御発展を祈ります。

市川市在住　戸井雄治

（戸井様、どうぞ御住所をお知らせ下さい）

＊　＊　＊

突然お手紙させて頂きます。

私は三十八才になります一主婦ですが、娘時代からの義太夫フアンであります。子供に手のはなれた昨今、どうしても又、好きな義太夫にふれたいと、二十一日、久しぶりに本牧亭に足を運びました。昔、毎月通った本牧は木造で、もっと小さく、舞台ももっと可愛らしいものでしたが、その立派になったことにまずびっくりしました。壁ぎわに一人席を取ると、その昔、小土佐師の一世一代の舞台であの小さいお年寄りの大熱演に涙して感激した日を、目のあたりに思い出しました。若手から次々演じられる新口、柳、沼津、熊谷、壺坂と、体中に力を入れて聴きほれました。久しぶりの熱演にふれ、幸せをしみじみ感じました。お客も以前よりはるかに大勢で、年令層も広がり、昔、年寄りに囲まれヒツソリ聴いていた頃がなつかしく想い出されました。

私のようなただの一フアンが居ても何のお役にも立ちませんが、協会を心から応援したい気持として、失礼とは存じながらわずかばかりのお小遣いをお送りさせて頂きます。入会案内のプリントも頂きましたが、ただのフアンが入会するようなものではない様に拝見しましたので、お送りさせて頂きます。もし厚かましくもお願い出来るなら、本牧の公演通知を頂ければ毎月聴きもらすことも無く、幸せに存じますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

五十年九月二十三日　高村珊子

＊　＊　＊

義太夫を応援して下さる方こそ、是非会員になって頂きたいというのが協会の願うところです。高村様にも早速お話しして、会員になって頂きました。こうして、会員層が広がって行くのは本当に心強いことです。どうも有難うございました。

―事務局―

編集後記

新年明けましておめでとうございます。

何とか年を越して、新たな気持で、今年こそ飛躍の年にしたいと張り切っております。五十一年度も、各種公演会をはじめ、義太夫教室、学校巡演に、これまで以上に力を入れるつもりで、今月末には理事会で細かいプランを練ることになりました。やりたいことは山ほどありますが、着実に歩を進めたいと思います。どうぞ本年もよろしくお願い申し上げます。